

# 史遊会通信

No. 205  
平成 24 年  
1 月 10 日  
発行

事務局  
☎ (03)  
3712-0651  
下山田方

十一月講演要旨

## 古代出雲国筆頭熊野大社の盛衰

村上 邦治

はじめに

出雲の神社といえば出雲大社、熊野大社といえは紀州熊野三山がまず浮かぶ。しかし七世紀から九世紀にかけて古代出雲国の第一神格は意宇郡熊野山にある熊野大社であった。又『延喜式神名帳』記載の熊野神社は五社あるが、当大社と紀州熊野二社が名神大社として全国に知られていた。

九世紀以降出雲国造が衰退し、その後も悪条件が重なり、ついに江戸期には歴史上からその名前が消滅してしまふ。しかし明治維新により国幣中社として復活する。一方出雲大社（江戸末期までは杵築大社）は官幣大社となり伊勢神宮につぐ唯一の

大社となった。熊野神社は明治六年大洪水により社殿は流失してしまふが、終戦直後に再建され今日に至っている。

このような数奇な歴史を持つ出雲熊野大社の盛衰を辿ってみたい。

熊野大社概要

場所 松江市八雲町熊野

旧島根県八束郡八雲村

祭神 熊野大神 櫛御氣野命（スサノウ命）

本殿 大社造（昭和二二年造営）

別名 日本火之出初之社

一 繁栄期（七世紀から平安前期）

編纂者が出雲国造であることから在地文献

例会のお知らせ

◎ 1月総会

日時 平成24年1月25日（水）

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

議題 \* 23年度事業・会計報告

\* 24年度事業計画 他

◎ 総会終了後

講演 小田紘一郎氏

テーマ 「奥の細道を歩く」

自由執筆は森下征二・佐藤健一

山本鎮雄の諸氏

字数 20字110行（題込）

締切 1月末日

◎ 2月例会

日時 平成24年2月22日（水）

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 鯨游海氏

テーマ 「名曲に潜む诗情」

とみられる『出雲国風土記』には、四大神として熊野大神(熊野大社) 杵築大神(杵築大社) 佐太大神(佐太御子社) 野城大神(野城社)を挙げている。その中でも大社は熊野と杵築の二社であり、熊野大社は第一番目に記載されており、当国の筆頭に位置付けられている。八世紀から出雲国造は代替わり際『神賀詞』を天皇に奏上する儀式が始まるが、その中で熊野大神櫛御氣野命と杵築大神大穴持命の二神を掲げているが、ここでも熊野大神は杵築大神より先に奏上されている。

中央文献では『延喜式』(九二七年)に出雲国意宇郡筆頭に熊野坐神社が名神大社として記載されている。出雲郡には大穴持神社(場所不明)に続いて杵築大社がやはり名神大社として掲載されている。

六国史の一つである『日本三代実録』(九〇一年)貞観九年(八六九年)の条に「從二位勲七等熊野神 從二位勲八等杵築神 並んで正二位を授く」とあり、九世紀半ばまでは熊野大社が杵築大社より上位であったことは明確である。

一方神事からみると、上下の関係がより明白となる。出雲国造代替わりには火継神事が行われる。先代が亡くなると後継者は熊野大

社鑽火殿に入り、神火を鑽り出し神火相統を行う。また出雲大社の重要神事である古伝新嘗祭では、神事に使う杵と臼は熊野大社から授けられたものが使われる。そのため出雲大社側では熊野に赴き平身低頭してそれらを貰い受けるのである。

祭神は、杵築神の大穴持命(大国主命)は国神であるのに対し、熊野神は天神であり、当然熊野神が上位である。

社殿造営については、杵築大社では『日本書紀』斉明天皇五年(六五九年)の条に「是歳。命出雲国造。修嚴神之宮」をもって、七世紀半ばとしている。しかしそれに続く二つの逸話はいずれも意宇郡で起きたもので、嚴神之宮は熊野大社に比定する方が相応しい。杵築大社の大高層社殿造営は記紀の国譲り神話に求められるが、神話完成は天武期とみられ、斉明五年では約二十年早く、杵築大社とはみられない。杵築大社の社殿造営は記紀神話が全国に波及する八世紀以降とするのが妥当である。この条の宮とは在地でも中央でも当時第一の神格であった熊野大社であろう。

以上から九世紀半ばまでは熊野大社は出雲国で最も崇拜されていたのである。

## 二 衰退期(平安中期から江戸末期)

熊野大社最大の支援者である出雲国造は八世紀末急速に勢力を弱める。これまでの意宇郡郡司大領を解任され、杵築大社官司に専念させられる。その為これまで本拠としていた意宇郡を離れ出雲郡杵築に移住する。

鎌倉時代には経済基盤を失い、熊野大社支援の余力も無くしてしまふ。一方杵築大社は記紀神話の拡がり、「天下無双の大廈」として評判を呼び、出雲国のみならず全国から参拝者を集めるようになった。

出雲国造家は南北朝期に千家家と北島家に分裂する。しかし既にこの時代には熊野大社は衰退しており、両家は熊野大社の祭司を選挙する事はなかった。

当地は鎌倉期以降佐々木氏、京極氏、山名氏、尼子氏、毛利氏と領主は代わるもの月山富田城を居城とし、城下の広瀬に経済文化の中心が移る。さらに江戸期には、松江に城下町が移るが意宇郡にもどることはなかった。

中世期に熊野山頂から麓に下り、二宮(上の宮、下の宮)になった。しかし度々戦火に会い、一五四二年の尼子大内の合戦で社殿は

消失してしまう。また急峻な山に囲まれた地形から、意宇川は何度も洪水をおこし社殿社地はその度に失われてしまう。古い歴史を持つ当社であるが貴重な文化財は残っていない。

中世以降紀州熊野信仰と伊勢神宮が全国に拡大する。出雲国においても松江藩の地誌『雲陽誌』(二七一年)によると、上の宮は熊野権現とよばれ熊野三山の勧請神社となった。また下の宮は伊勢神宮に関連する伊勢宮となり、アマテラス大神も祭神になった。かくして明治期になるまで、熊野大社という社名は消失してしまうのである。

自由執筆

鷺沢・蘇武・細倉鉦山と鉄

中山 喬央たかひろ

私の机についている書棚に『渡来人と蘇武』(続)編著そぶひろし(二〇一―九)発行という本がある。その本の48頁から56頁にかけて柴田弘武著『全国「別所」地名事

三 再興期(明治期以降)

明治維新となり王政復古政策にて同地で甦る。神社調査に基づき明治四年新たな社格制度が設けられ、当社は国幣中社に格付けされ復活する。しかし大社の社号は禁止された。当制度による大社が名乗れたのは出雲大社のみで官幣大社として最高位を与えられている。当社は明治三九年に一村一社制により上の宮と下の宮が現在地に統合された。尚大正五年には国幣大社に進級している。社殿は明治六年の洪水により流失したが、昭和一六年より造営を開始、二二年に竣工し、現在に至っている。

戦後は神社神道と国とのかわりが禁止さ

典』上巻三三一頁〜三三四頁の中新田町別所と蘇武関連記事が転記されており、柴田さんに、全文のコピーを送ったところ、鷺沢・蘇武・細倉鉦山は全て鉄でつながるといふご連絡をいただいた。

それを考察した結果の一文である。

先ず蘇武について述べる。『細倉鉦山史』三菱金属鉦業・細倉鉦業所刊一六頁〜一九頁「御金山下代」で仙台藩の職制につき概ね次

れ、神社の格付けも廃止された。五二年には大社の社号復活が実現し、ここに名実とも熊野大社は復活を果たした。

現在出雲大社は全国的な名声を獲得し多くの参拝者を集めている。一方熊野大社は古代から変わらない神事により、僅かに出雲大社より上位であった古代出雲国筆頭神格を忍ばせている。

近年荒神谷遺跡や加茂岩倉遺跡の発掘により、古代出雲について注目を集めてきているが、熊野大社の見直しも高まる事を期待したい。

の様に記している。「藩は民政の円滑な実施を期するため、貢租を郷民に合理的に割賦して上納を完結させる任務を一部有力者に与え、そのかわりに職俸の他、名字帯刀を許し、家構えを特別にするなど、種々身分上の特権を与えた。鉦山についてそのような特別な地位を与えられたのが御金山下代であり、鉦山鉦石、温泉などを管理し、権力も強大で、鷺沢付近でこれを勤めたのは、北郷肝入

蘇武家であった。

『鶯沢町史』五六〇〜五六二頁には「蘇武氏は前漢武帝の臣であったが、支慶の代、承知六年（八三九）遣唐使藤原常嗣の帰朝の時随行した。その後、延喜年中頃から北面の武士となり、弘安の役には九州に赴いている。（中途略）この流れを汲む義満の次女が袋館主、袋豊後守の室となり、義満の婿養子も長男と共に、二迫袋に來村し、鍛冶屋敷に居住した。この係累から天明の大飢饉の最中に村の最有力者の地位についた蘇武専蔵が出る」と記され、また六二三〜六二五頁には、異説として「上多田川村の、別当鳥頭坂には蘇武氏という旧家がある。（中途略）古代に百濟より來日し、そのまま帰化した人が祖となり、その後白雉四年（六五三）に、阿倍比羅夫が蝦夷征伐を行なった時、それに従い東

自由執筆

船が浮いてる

高橋 由貴彦

三・一一東日本大震災の石巻市での事です。午後二時四六分の大地震と、約一時間後

北に下向し、そのまま現在地に居住した」とある。

次に細倉鉾山は、大同年間（八〇六〜八一〇）開発のいわれを持つ、日本有数の鉛・亜鉛鉾山であるが、鉾石鉾物として、方鉛鉾、閃亜鉛鉾、黄銅鉾、四面銅鉾、黄鉄鉾、纖維亜鉛、白鉄、磁鉄鉾、赤鉄鉾、輝銅鉾、輝安鉾、濃紅銀鉾、自然銀、自然銅などを産出している。

更に「鶯」と「そぶ」は名前そのものが「鉄」と結びつくと柴田さんが指摘されたが、その通りである。

筆者は『鉾山研究』第88号「釜石鉾山紀行」（二〇一一／三）により、日本列島での砂鉄及び鉾石からの鉄製錬は弥生時代後期（二〇〇〇年前）から、西日本と東北で同時発生し、東北でのそれは、漢の名臣であり、且つ

匈奴の流れをも汲む、蘇武氏の関与が大であると愚考した。

それは柴田弘武著『産鉄族才才氏』潮来の大虐殺、『日本書紀』神武天皇即位前紀、五瀬命の件、『住吉大社神代記』かご坂王・忍熊王と神功皇后の宇治川決戦で、何れも両軍に武器である鉄の優劣はなかったことから明らかである。

また中世・近世において金・銀・銅鉾山の場合、鉾山町が形成されたのに対し、鉄ではそれが全く見られなかったことと、柴田さんの、蝦夷を強制移住させ製鉄に従事させた場所を「別所」とするお考えと、蘇武氏の関与による東北地方での製鉄発生とが、三者相補の関係にあると愚考する。

の大津波で石巻はほぼ全滅しました。

報道では五割りとか六割りが壊滅とか言っていますが、平成の大合併で新しく石巻に組み込まれた広域山野地を含んでの話です。

私は昭和五年の石巻生まれ。幼年期をこの地で過ごし、医師の父の転勤でその後は仙台

で育ちました。

幼年期の石巻での港独特の風情での思い出はことのほか強く、心の残照として何時までも脳裏に刻まれています。

石巻の西に有名な「万石浦」入り江があり、いわばその入り口あたりに渡ノ波があり

ます。例の支倉常長の使節船再現船の『サン・ファン館』がここに建てられています。再現船はドックに浮かび、山の斜面を巧みに利用した石井和紘氏設計の代表格とも言える総強化ガラス主体の三階のミュージアムで、海浜に面した一階が主展示場になっています。私もこのミュージアムの企画段階から関係し、日本では唯一の帆船資料があるユニークな体験ミュージアムとして親しまれていました。

そこに十四メートルの大津波での直撃の海牙が襲ったのです。

帆船の復元船は八方でマニラ麻の太綱で固定されていましたので、そのまま波に浮き上がり、船尾が一階の展示場の屋根に激突しましたが、軽傷で済みました。その後の台風で前マストと主マストの先端が倒され、今は無残な姿をさらしています。船体の中はまらず無傷の様子ですが、詳細は不明とのこと。しかしあれだけ当時の測定航海器具やジオラマ、帆船模型、など当時の複製や造船過程の見事な展示物を誇った主展示品は数百枚の強化ガラスで囲まれていた展示室さえも全滅し、瓦礫とても残さずに、すべてを失ってしまいました。

六月にようやく仙台と石巻間の道路が通じた頃、駆け付けた私が見たままの感想を述べてみましょう。

『サン・ファン館』は渡ノ波の百所帯ばかりの災害者の避難所になっており、閉館のままでした。被災者はただただ無言でした。

事務所には異臭漂う中、濱田館長と一人の学芸員、そして数名の職員だけがおられました。二重マスクとゴム手袋にヘルメットと防護服を着用して展示室の被害を拝見しました。海蠅のような虫に体中囲まれながら、館長の独り言が今も強烈に心に刻まれています。

「やはり船だから浮いているんですね、展示資料はすっかり何もなくなっただけです。石巻の漁船もすべて流されてしまいました。この帆船だけは津波に耐え立派に浮いていました。」

館長の目には涙があふれていました。

先の十月二十九日。支倉常長のローマ使節の日本出港四百年祭がおこなわれました。

『サン・ファン館』はこの日一日だけの特別開館で、私も夫婦で招待されました。

正面入り口に当たる丘は特設解放庭園広場

になっており、三千名に近い観客と関係者が集まり、式典が始まりました。千坪近い石畳の広場はぎっしりの出店で囲まれ、数十名からなる仙台・石巻のボランティア劇団の「支倉常長の使節船出港劇」が大音響を伴って始められました。続く和太鼓の連奏。晴天に恵まれた晩秋の一日が、賑やかにおこなわれました。

入り口に当たる三階の一フロアだけが解放され、私が寄贈した慶長使節支倉関係の百枚近くの大伸ばし写真も展示されました。

制服をまとった顔見知りの若い女性案内人に会釈を受けました。

「今日一日だけの臨時職員なんです。私も被災者で、近くの災害被災住宅におります。今日のお客さんはほとんどが被災住宅の方々なんですよ。」悲しい事に津波以降はミュージアム閉館のため、おそらく派遣職員は解雇されているのでしょうか。

彼女はあの時の大津波の実態を詳しく説明してくれました。

「地震直後、私は三階に当たる海が一望出来る広場に逃げました。全館停電。強烈な地震で展示品は散らばっていました。『逃げろっ!』の声に促され、外の広場に走りまし

た。やがて水平線の彼方から真つ黒い波らしい山のようなうねりが押し寄せて来ました。『きたきたきた！』とだれかが叫んでいました。『きたきたきた！』とだれかが叫んでいました。だが、あとはただ呆然と、本当に呆然自失として津波のくるまま何も出来ず、恐怖の海を見ていただけなんです。やがて真つ黒な大波が近付き、四、五メートルの湾口の防波堤を難なく乗り越え、膨れあがった海面が一気に向かってきました。十四メートルの高さの大

津波は館の左手にある数十戸の二漁村をかるがると越え、そのまま村を飲み込んで一気にミュージアム館に押し寄せました。大波は一階の展示室の大庇屋根までを越えて逆巻く波は縦横無尽に暴れ回りました。見渡す限りは波打つ大海原だけで、何度も何度も繰り返し黒い津波は押し寄せました。帆船サンファンバウチスタは何度となく左右に大きく傾き揺れながら、ただ一艘だけが浮い

ていました。すべてを飲み込んだ海面は、夜になってもそのまま引きませんでした。恐怖に満ちた時間でした。一生忘れられません。あの時の海の狂った形相と妙な静けさ。石巻の大火災を海面に写す真紅に染まった海映えを。」

一日も早い復興と復職を祈るばかりです。あの偉容誇る壮大なミュージアムよ

## 自由執筆

## 黒船物語 (三)

## 世界情勢と幕末 (ロシア編Ⅱ)

由利 潤一

二度目の使節は一八〇四年(文化一年)クルーゼンシュテルンを長としたロシア初の世界周航船隊が派遣されたとき、宮廷の侍従長であるとともにロシア・アメリカ会社の幹部でもあるN・Pレザノフがこれに同乗して長崎に寄航し幕府と通商交渉することになった。この交渉は長崎で永く待たされて、幕府

は鎖国を理由に皇帝の書簡さえも受け取らないという使節にとっては屈辱的な結果に終わった。非常に怒ったレザノフはクルーゼンシュテルンと分かれた後、ロシア・アメリカ会社の船二隻に命じて国後、択捉や樺太の日本の施設を攻撃させ、利尻、礼文では日本船を焼いた。このことは「文化の露寇」として日本に衝撃を与えた。レザノフは帰国後自分の行為を追及されることを恐れ首都へ弁明の書簡を送ったがナポレオンに攻撃されている首都から何の指示も無く、シベリア経由で帰国する途中で死亡する。レザノフによる乱暴な日本攻撃は、千島の調査を行っていたディア

ナ号の艦長ゴローニンの幕府役人による逮捕、幽閉問題を起こす。これに対抗してロシア側は一八一二年に高田屋嘉兵衛の船を襲い、嘉兵衛ら乗組員が捕らえた。この事件は嘉兵衛の努力で蝦夷地攻撃がロシアの国家としてではなくレザノフによる私的な行動であったことが幕府に了解され、ゴローニン達と嘉兵衛ら双方が釈放され無事解決した。

そして一八五三年(嘉永六年)のプチャーチンの第三次使節派遣になる。ペリーが再び来航するといつて浦賀を去った直後、プチャーチンは四隻からなるロシア艦隊を率いて七月に長崎に来たが、日本側に拒否され退去す

る。十二月に再来しプチャーチンは幕府から任命された筒井政憲、川路聖謨らと通商、国境問題の討議に当たるが、クリミア戦争が勃発しかかっておりロシア艦隊は一旦長崎を退去した。一八五四年(安政一年)長崎に再び

来航し交渉条件の覚書を幕府に提出。同年九月に露領から移乗してきた軍艦「ディアナ号」で函館を経て大坂天保山沖に現れ、幕府の要請で下田に回航した。当時起きた地震、津波で十一月に乗艦が大破し後に沈没したが下田に上陸して同地で交渉を進め一八五四年(安政一年)十二月に日米和親条約と同様の日露和親条約を締結するのに成功した。この条約では国後、択捉は日本領、樺太は雑居地とされた。

(友の会)

自由執筆  
古代の遠州森町

鍋屋 次郎

遠州森の石松の出身地であることや、廣澤虎造の浪花節の一節に「流れも清き太田川、若鮎おどる頃となり、松の緑の色も冴え、遠

州森町よい茶の出どころ」と謡われた、知る人ぞ知る遠州森町の、千三百年〜千五百年さかのぼる古代をご紹介します。こととする。

その一つは、遠州一宮(現森町)に大己貴命(おおなむちのみこと・・・大國主命の別名)を祀る小国神社である。創建時期は不明であるが、社伝によれば、欽明天皇十六年(五五五)二月十八日、現在地より六キロほど離れた本宮山に神霊が示現したので、勅命によりそこに社殿が造営されたのに始まる。なお、小国神社の名前は、出雲が大国であることから小国と美称されたとも言われている。

歴史的文献では、「続日本後記」承和七年(八四〇)六月十四日条で「遠江国周智郡の無位の小国神社に従五位下を授け奉る」と記されているのが始めである。

皇族や武將の信仰が厚く、遠江国一宮として崇敬を受け、明治六年(一八七四)には社格は国幣小社にまで格式は上がっていた。

一宮という名称から考えれば、大和朝廷からは遠江国は近江に対する東国の遠隔地で、欽明天皇が神社を建立したその地を遠江国のかなめとして一宮の名称を付けたものと考え

られる。

二つ目は、天台宗八形山安住院蓮華寺である。この蓮華寺は文武天皇の勅願寺で慶雲元年(七〇四)行基による開創と伝えられ、二世行海(七〇九年就任)より数えて当代は百三十九世に至る。

寺伝によれば、天長八年(八三一)十六世慈覚大師が天台宗に改宗、一山三十六坊を建立し、七堂伽藍の整備を行い、比叡山延暦寺第三世座主となる。本尊は聖観世音菩薩像で、慈覚大師の一刀三礼(仏像を刻むのに、一刀を入れるごとに三度礼拝する)の厄除け観音と伝えられ、六十年ごとに開帳される秘仏である。嘉応元年(一一六九)延暦寺より皇円阿闍梨を招き、当山の山頂奥の院に正覚院を建立、念仏三昧の修業をした。

蓮華寺の三十六坊と奥の院などは戦国時代武田勢の襲来等により焼失し、慶安五年(一六五二)には一坊を残すのみであった。その後徳川家や掛川の山内家等からの寄進により寺領を受け安堵された。

蓮華寺の古地図から考えられることは、八形山は現在の本堂から二キロ程度北側にあり、そこから山を西に下ると小国神社があ

る。

蓮華寺の記録(開創千三百年記念事業記念誌「天台宗八形山安住院蓮華寺」)では、時代は不明であるが、蓮華寺が遠江国一宮小国神社の社僧を務めた、との記録がある。これは中世に領域内外の村の鎮守の建て替え時や遷宮時の導師を務めていたことを示す棟札の存在から考えられることである。

大和朝廷が遠江国を治めるに当たり、一宮小国神社を行政の府とし、蓮華寺を鎮護国家の仏教政策を担わせたのではなからうかと考える。遠江の山中に、連なる山に隣り合わせて存在する小国神社と蓮華寺が、当時の大和朝廷の政策を垣間見ることができ。

あと一つは、一宮の鋳物師の存在である。歴史的には中世からの記録はあるが、この一宮の鋳物師の古くからの存在(私見)が、大和朝廷が小国神社と蓮華寺をここに建立した理由なのではないかと考えられる。

鋳物師は金属を溶かし武器や各種の仏像、鐘、釣鐘、鯛口、鍋、釜などを鋳造するもので、彼らは戦国時代には一宮の社僧蓮華寺の支配下にあったと「森町史」に記録されている。なお、蓮華寺所蔵文書では、今川氏が蓮

華寺に金屋支配を承認した文書が残っていることから、時代のいつまでとは分からないが、蓮華寺が支配していたことは確かである。鋳物師は西脇(蓮華寺近くの地名)とその近くの西金谷に居住していた。正長元年(一四二〇)以降に鋳造された釣鐘がいくつか現存している。また、平成三年六月十一日に西脇から古銭七万六百九枚が出土していることは、経済的にもかなり豊かであったと思われる。

それから交通面からは、森町は古代から遠江の山間地域と平野部を結ぶ交通の要衝であったことである。今でこそ東海道線から外れているが、山間部から降りてくると、東は掛川へ、西は浜松方面につながる分岐点にあり、大和朝廷もこの点も考慮に入れたのではなからうか。

### 事務局だより

新年のご挨拶を申しあげます

おめでとうございませとは素直に言えない

新年ですが、会は頑張っています。

年末から新年にかけて史遊会通信を整理していて、亡くなった今野氏が最後に病床で「書きつづける奴は強い！」とお書きになった画帳を見つけました。じっと見つめないで読めないほど震えた字ですが、今野氏の意思を感じる墨画です。史遊会が長く続いているのも氏のそんな気持が受け継がれているからなのでしょう。事務局としては今野氏をはじめ先輩方の意思を大切に、会を継続させていきたいと思っています。

一月は前期会費の納入月です。九千円をお納めください。

次回から通信の一行の字数を20字に変更します。

総会で改めて発表があると思いますが、四月までの講演者及び自由執筆者の予定をお知らせします。

### 講演者

自由執筆者

- |    |       |           |
|----|-------|-----------|
| 一月 | 小田紘一郎 | 森下・佐藤・山本  |
| 二月 | 鯨游海   | 村上・島津・( ) |
| 三月 | 隆 恵   | 千坂・平山・中込  |
| 四月 | 鍋屋次郎  |           |